

令和3年度 杉並区立荻窪小学校 経営・評価計画 「自己評価報告書」・「学校関係者評価報告書」 校長 西脇 裕高					
学校の教育目標		◎美しい心の子ども ○深く考える子ども ○たくましく生きる子ども			
令和3年度 経営計画・評価計画					
区分	評価指標・評価基準		結果と成果		評価
特色ある教育活動	重点目標	目標実現のための方策	取組(努力)		3
	「心を育てる」人間の尊厳教育(ヒューマンダイギニティ教育)の推進	・思いやりや美しい心をもった子どもを育てる。自分と他者との違いを認め、どの子も大切な存在として関わる、人権感覚を磨いていく。また、オリンピック・パラリンピック教育を推進し、障がいのある人の理解を深め、共生社会の実現や国際社会の平和や発展、貢献について考える。	・「心を育てる」書の学習「言葉のチカラ」の実施。 ・特別の教科道徳における「話し合い、考える」授業年、子どもが主体的に学び、心を育てる機会にできた。 ・人権メッセージ「命・友達・いいじめをなくす。ありがとう、よりよい学校」の通年実施。 ・オリンピック・パラリンピック教育のレガシーの継続。	・全学年で書の学習「言葉のチカラ」を実施し、自分を見つめる時間の大切さを学ぶことができた。 ・特別の教科道徳を「話し合い、考える」授業年、子どもが主体的に学び、心を育てる機会にできた。 ・人権メッセージの全校実施が定着し、子どもの自己理解、他者理解が深まっている。 ・東京オリンピック・パラリンピックの開催を通して、国際理解や障害者理解の契機がもてた。また、自國を見つける機会にもなり、自国文化の良さを再確認できた。	
	「一人一人を大切に」特別支援教育の理解と推進	・「一人一人を大切にする」という視点で、保護者に全校で取り組む特別支援教育について理解を得、安心できる学級・学校となるよう体制を整え、必要な方に応じた相談・指導を行なう。特別支援教室「すまいる」での指導の充実と通常の学級との連携に努め、子どもとのニーズに応じたきめ細やかな指導を工夫していく。	・全学級で取り組む特別支援教育の保護者理解の推進。 ・特別支援教育校内委員会の毎週開催。 ・特別支援教室「すまいる」と通常の学級との連携指導。 ・通常の学級における指導、支援の充実。	・特別支援教育校内委員会を毎週開催し、組織的に指導支援策を検討した。 ・特別支援教室「すまいる」の保護者質問会を開催し、入室希望者が増えた。 ・巡回指導員が巡回指導員と在籍学級担任の連携の時間を十分に取ることが課題。 ・巡回心理士や教育支援チームの助言も生かし、通常の学級における指導、支援の充実が図られ、落ち着いて学ぶ子どもが増えた。 ・教育調査「特別支援教育の理解・啓発」の保護者肯定率は50.5%に留まっている。(否定率5.9%)	2
	「つながりを活かす」小中一貫教育・幼保小連携教育の推進	・小中一貫教育のグループである宮前中学校、久我山小学校、本校の3校で、「かかわり、つながり」を重視し、小中一貫教育を一層推進する。また、幼保小連携では、近隣保育園と連携し、新1年生のスタートカリキュラムについての検証を行う。	・小学校と中学校の学校間の交流推進。 ・9年間の系統性と連続性のある指導の推進。 ・グループ3校での「主体的・対話的で深い学び」の実現。 ・近隣保育園5園との交流推進。 ・幼保小連携研修会の開催。	・コロナ禍で活発な交流は難しかった。 ・中学校生徒会役員が来校し、中学校生活説明会を開催した。熱心に話を聞く第6年生の子どもの姿があった。 ・近隣小中3校による連携研修会を開催した。 ・近隣の5保育園が学習発表会の1年生発表を見学した。 ・近隣保育園5園との中学校での連携研修会を開催した。 ・教育調査「小中一貫教育」の保護者肯定率は29.5%に留まっている。(否定率12%)	
	「広い目を育てる」環境教育の継続・充実	・エコスクールとして、本校の特色である環境教育を継続、発展させ。日本建築学会や学校支援本部と連携しながら、「自分さえよければ、今さらよければ」という考え方ではなく、地球環境を守り、持続可能な社会を意識して、自ら考え行動できる子どもを育てる。環境活動に積極的に取り組み、小中学生環境サミットに参加する。	・萩小環境学習プログラムの充実。 ・環境委員会の活動の充実。(区環境サミット参加) ・エコシステム校舎の保護者・地域の方々の理解促進。	・学習指導要領改訂に合わせ環境学習プログラムの見直しに取り組んだ。 ・学習発表会では、第6年生がSDGsをテーマに発表した。 ・環境委員会の子どもたちが、環境ボランティアの協力のもと活動した。 ・環境サミット参加を目指し、環境委員会の活動をまとめることができた。 ・コロナ禍で保護者、地域向け「エコツアーア」は開催できなかった。	3
学習指導	主体的・対話的で深い学びの成立を目指す授業力の向上	・校内研究として、主体的・対話的で深い学びが成立するよう「問い合わせ、考え、話し合ひ」授業を展開し、指導改善を図る。同時にICTを積極的に活用し、どの子にもわかりやすい学習展開を工夫する。	・「学ぶ子どもを育てる」を研究主題に、「問い合わせ、考え、話し合ひ」授業を展開。 ・ICTを活用した授業の推進。 ・保護者や地域の「主体的・対話的で深い学び」の大切さへの理解を図る。	・「学ぶ子どもを育てる」という研究主題のもと、「問い合わせ、考え、話し合ひ」授業づくりに取り組み、全学年で研究授業を行った。 ・1人1台のタブレットを活用した学習を全学年で実践した。 ・学校だより、学級だよりにより、子どもの学びが変わっている様子を、保護者、地域に周知した。 ・教育調査「ICTの活用」に関する肯定率は、保護者73.0%となった。児童も92.5%であった。 ・第6年生の子どもの「探究的な学び」「協働的な学び」の肯定率が9割となっていた。 ・教育調査「学習成果の実感」の肯定率は保護者74.4%(否定率5.5%)、児童84.3%(否定率4.5%)であった。	3
生活指導	全校による生活指導体制の確立	・いじめ、不登校、問題行動に対して、学校組織で対応すると共に、危険を予測し回避する能力や他者や社会の安全に貢献できる資質や能力を育てる取組を行う。	・「学校いじめ防止基本方針・全体計画」の実践。 ・いじめ防止対策委員会の毎月開催。 ・「荻小スタンダード」に基づく共通指導の徹底。 ・スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携。	・毎月、いじめ防止対策校内委員会を開催した。 ・いじめのアンケートを年間3回実施し、課題解決に役立てた。 ・現在、未解決のいじめ案件は無い。 ・不登校傾向等については、組織的対応を心掛けている。オンライン活用等により、学校とつながる機会を増やしている。 ・感染症予防に努め、大きく体調を崩す子も無く、過ごせている。 ・教育調査「教育相談体制」の保護者の肯定率は60.4%、「いじめ対策」50.4%、児童の肯定率は73.2%であった。	3
体力向上	年間を通して全校で取り組む体力づくり	・体力調査の結果を分析し、日常の遊びや体育の授業、特設の体力向上の取組(荻バト)の実施で、体力づくりに取り組む。	・体力調査を実施し、体育の授業改善や日常的体力向上の指導充実。 ・「荻小パワーアップカード」の作成による体力向上の取組。 ・効果的な食育指導の展開。	・体力調査を実施し、実態と共に、体力向上への意識を高めた。 ・「荻小パワーアップカード」を作成し、継続的に体力向上に取り組める環境をつくりた。 ・栄養教諭と学級担任が連携し、食育授業を行った。 ・運動調査「体育・健康教育」に関する保護者の肯定率は76.6%(否定率4.3%)であった。	3
特別活動	子どもが中心となった特別活動、学校行事	・高学年への「あこがれ」低学年への「やしさ」をテーマに、子どもとの実験的な態度を育て、自分のよさを生かす学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事を実施する。	・行事、特話を通して、他者理解が深まる交流活動の実施。 ・「サクランボ祭り」の開催による異学年交流の充実。 ・代表委員会を中心とした子供たちの実践的な取組。 ・縦割り活動「なかよし班」遊びの充実。	・コロナ禍により行事、特別活動は制限をかけて実施した。 ・異学年交流「サクランボ祭り」を実施し、全校の子どもたちが交流した。 ・代表委員会を中心に周年記念集会を企画運営した。 ・コロナ禍で回数や内容が制限されたが、縦割り活動「なかよし班」遊びを実施した。	3
学校運営	学校支援本部との連携	・学校支援本部と連携し、日常の授業や土曜授業において、質の高い授業や安全に配慮した授業を提供する。	・学校支援本部やPTAとの連携。(外部講師、授業支援)。 ・学校園での栽培や園芸活動の計画的実施。 ・校外活動や家庭科の実習の安全な実施のための補助支援。	・学校支援本部の協力のもと、特色ある教育活動を開催できた。 ・書の学習「言葉のチカラ」を全学年で実施した。 ・地域の協力により学校園等の栽培活動を進めた。 ・校外学習や実習の安全管理が十分にできた。 ・教育調査「地域との協働」の保護者肯定率は68.8%、児童67.6%であった。	3
	学校運営協議会との連携	・保護者や地域と共に創るコミュニケーションスクールとしての学校づくりを行なう。 ・「学校運営協議会委員」を中心に学校関係者評価を実施する。	・学校運営協議会の毎月開催。 ・教育活動の場の参観。 ・学校運営協議会の内容の周知(広報プリント発行)。 ・学校運営協議会委員と教員の懇談会開催。 ・学校関係者評価の実施。	・毎月、学校運営協議会を開催した。 ・コロナ禍により教育活動参観の機会は限定的であった。 ・毎回「学校運営協議会だより」で各家庭に、協議内容を周知した。 ・学校関係者評議で、学校運営協議会委員を中心に、学校評価を行った。 ・教育調査「経営・監督」の保護者の肯定率は80.5%(否定率3.6%)「学校評価」肯定率68.8%(否定率4.1%)であった。	3
その他	指導の組織化	・関係職員の専門性を生かし組織的な指導を図る。	・スクールサポートスタッフ、学校司書、特別支援教室専門員、学習支援教員、スクールカウンセラー、介助ボランティア等との連携。	・スクールサポートスタッフの配置により、校務軽減が図れた。 ・それぞれの専門性や立場の違いを生かした教育活動支援ができた。 ・都中堅教諭資質向上研修の機会を通じて、互いに情報交換し学び合えた。	3
	人材育成	・OJTおよびOff-JTによる人材育成を、組織的・計画的のまた主体的に行なう。	・若手教員の育成授業の実施。 ・校内の研究会、研修会への積極的な参加で研修成果の校内共有。 ・学期1回以上の自己申告の授業観察の実施。	・若手教員の育成授業を校内教員も観察し、意見交換した。 ・都中堅教諭資質向上研修の機会を通じて、互いに情報交換し学び合えた。 ・自己申告の授業観察時に、学期1回以上の授業公開を行った。 ・校外の研修会に参加した教員が、校務システムにレポートを掲載し、学びを共有した。	

学校関係者評価委員会委員長 佐野 英之

評価 基準	
4 優れている	3 良い
2 努力を要する	1 要改善
次年度の取組・改善課題などのコメント	評価 委員会 評価
目標の重点は「美しい心の子ども」とし、引き続き「育てる」教育活動を充実させる。 のふれあいを大切にした「言葉のチカラ」のような場を広げていく。 権メッセージを継続する。 ンピック・パラリンピック教育のレガシーを大切に、理解、自国理解、障害者理解を深めていく。	学校関係者評価委員評価
ての子どもを大切にする「特別支援教育」の考え方。 保護者に十分に理解してもらえるよう、保護者会やHP等で積極的に発信していく。 特別支援教育校内委員会の毎週開催を継続する。 特別支援と通常の学級の連携の時間をさらに生ず工夫をする。	3.4 問題行動のある子どもに対して、教師が1対1指導するだけではなく、クラスの子どもたちと一緒にその子の個性に配慮しつづらが考えながら行動しているように見える。 「自分は人ともがいてもいいんだ」という意識が自己肯定感にもつながる。個を伸ばすという方針をより一層学校生活の中で浸透させてほしい。 「人間の尊厳」というのは一朝一夕に身に付くものではなく、周囲の人たちの言動も含め、常日頃から継続的に子どもたちに言い聞かせ、浸透させていくことが非常に重要だと思う。 「尊厳」とは抽象的なものであるため、伝える側としては難しいテーマであるが、特に今年度はオリンピック・パラリンピックといった目に見える、子どもたちにとっても分かりやすいイベントがあり、コロナ禍でも教員の尽力で、良い経験ができると思う。 東京オリンピック・パラリンピックに続き、北京冬季オリンピック・パラリンピックと今年度は、特別な経験ができる年で、生きた教育として努力された。 どの学年も落ち着いて学校生活を送っているようであり、道徳や「人権メッセージ」、「言葉のチカラ」などの指導や活動を通して思いやりをもってお互いを理解しかわり合う心が育っている。 「言葉のチカラ」では書を学ぶだけでなく、自己を見つめる機会になっているよう。それを全学年に実施していることは大変意義あることだと思われる。 子供の年齢で、自分と他者との関係を理解することは、難いことに思える。しかし、この年齢の時に人格が形成されることも確かである。書道の学習「言葉のチカラ」を自身を見つめる学習に位置づける取り組みは貴重なことと思われる。 教育目標の最重要項目である「美しい心の子ども」を育てたため、一番取組みを強化すべき施策であり、厳しい環境下においても、工夫しながら継続的に推進していると理解している。 コロナ禍の中、大人もええストスを感じ様々な問題が起こる中、大きな問題もなく穏やかな学校生活が送れているといふことは、子どもたちの心が豊かであるということなのだと思う。 全学年の指導を通じ、どの学年ものびのび自分の意見を発言し、他者の意見も認めないというクラス環境が感じられる。
一貫教育や幼保小連携による「学びの連続性」を保護者、地域に十分に伝えていく。 保小連携により本校の「スタートプログラム」を改善する。 多の内容を見直し、教員間の児童生徒理解を深め の施策の成果を、保護者、地域に十分に伝える。	2.4 特別支援教室といった環境と、巡回心理士・教育支援チームの方など充実した人材が荻窪小学校には揃っていると思う。昨今、特別支援教育が必要とまではいかなくとも、一定時期・場面で助けや支えを必要としているグレーゾーンの子どもも増えており、保護者および教員の理解を深めると共に、全校一体運営が必要と考える。 保護者の理解推進のために、する説明会の内容や巡回心理士・スクールカウンセラーの活動等、より具体的な情報提供が必要と考える。 特別支援教室「すまいる」については、入室希望者が増えるなど保護者の理解は進んでいると思われる。通常の教室でも一人一人の子供の教育的なニーズに応じた指導、支援を工夫していることが基本になっていることを、引き続き周知していく必要がある。 特別支援教育への理解はしているとは思う。ただ教育活動の柱となる重要性・必要性への理解促進が不足しているのではないか。 特別支援教室への関心の「ない」が教育評議会に反映されている。コロナ禍ではあるが保護者に「すまいる」を積極的に紹介する機会がもつたってよい。 日々、問題なく子どもが通っている家庭にとっては、遠い存在を感じている場合が多數かと思う。実際はもっと身近な存在であり、相談しようか悩んでいる保護者にとっても相談しやすい環境であることの情報発信が必要である。 誰が、どんなプログラムを作り、実践、効果を挙げているのか、成果の周知が十分でないことが課題である。 「すまいる」教室の存在に特別感がないことが素晴らしいと思う。
スクールとして「環境」をテーマに教科横断的なプログラムとして「環境学習プログラム」を改善する。 ツツーを開催し、地域の方に本校を理解していく。 ボランティアの協力で環境委員会活動を充実さ	2.3 地域の保護者の、小中(公立)一貫に対する関心が薄いかもしない。各公立中学が特色をもち、魅力ある中学であることを示す良いと思う。 杉並区小中一貫教育の検証(令和3年5月)も参考にしたが、荻窪小学校においては6年生と1年生以外の学年では、あまり実感が沸かない施策だと思う。 本施設の目的と成果の情報発信が少ないと思える。 小中一貫教育について、保護者の肯定率は低く、その意義が伝わっていないと思われる。杉並区としての考え方や構想とともに、関係する小・中学校、保育園との具体的な活動計画などを伝えていく必要がある。 連携教育の重要性は学習面だけではなく、地域の学校の一部として地域全体を盛り上げることにもあると思うが、その面ではコロナ禍では難しかった。 「小中一貫教育」とは違い、「近隣小中学校との連携強化」という意味と捉え、評価されるべきと考える。 小中に限定することなく、幼保小の連携の取り組みは、評価したい。 教科担任制を小学校高学年にも導入する動きを考えると、なお一層中学校との連携は重要である。 活動や成果が表に出てく、評価も低いかもしれないが、これからのお教育にとても重要である。
体的・対話的で深い学びの実現を目指し、授業を推進する。 1台タブレットPCを活用し、個の学びと協働的な学習を展開する。 学習調査を分析し、授業の成果と課題を把握する。 問題解決的な学習を、全教科・領域で展開する。	3.4 まるごとエコスクールを活かした萩小環境学習プログラムの更なる充実を希望する。 子どもたちに一番身近な校舎が、校舎の施設・機能に関わる説明だけではなく、どんな視点から建設されたものなのか、他校より優れている点、その効果も含めてプログラムに組み込まれると、子どもたちの萩小愛・地域愛につながるのではないかと考える。 学習指導要領改訂に合わせ、プログラムの見直しに取り組んだことは、評価したい。 学習指導要領改訂があり、環境学習プログラムの見直しに取り組むことができたが、理科から社会科に環境のとらえる場面が変わったことから、子どもの理解や興味のもたせ方において、物の本質から、社会現象の理解へと変わった。プログラマとしては、改善の余地が残されている。 エコスクールという意味は環境を有意義に活用している。子どもたちの意識の高さを感じることが多い。 「広い目」ではなく、「広い視野」をもった子どもを育てる環境で教育は萩の誂うところだ。 若い人口も未来の環境に対する危機感は切迫で、それをより早い段階から意識させることで、その面では難しかった。 コロナが収束したら、エシカルスマ校舎の紹介を地域住民対象に行い、理解を求める良いと思う。 今年度の職員向エコワークは、2年ぶりに多くの参加者で行なったが、最後まで懸念するところはなかった。 エコスクールとしての「環境学習プログラム」に基づきながら、子どもたちの視点で改めて環境問題について考え、課題を探究するような学習を工夫している。 理科、家庭科、社会科などの授業の中で積極的に取り上げ子どもたちの関心を高めている。 SDGsを学習発表会の題材にしたり、子どもたちの考えた70周年記念のキャラクターがベンギンであったり、萩小と言えば「エコスクール」という意識が根付いているのは日頃の取り組みの成果だと思う。
め対策委員会を毎月開催し、組織的に対応す めの認知、解決への組織的な手立てを図る。 予防を徹底し、基本的な生活習慣とする。 ガレッジルーム等子供の居場所を整備する。 教員が教育相対応のスキルを上げる努力を続け	3.3 学校として「問い合わせをもち、考え、話し合う」授業づくりについて研究を積み重ねており、子どもたちの学習の様子や態度にも大きな成果が現れている。 授業参観において、子どもたちが互いに教え合っている姿を見た。学び合いが授業の中で生まれる指導の成果だと思う。このような指導をさらに進めると良いと思う。 授業の方向性として、受動的ではなく、このとの大小に関わらず疑問をもち能動的・主体的に動く大切さ、対話的で建設的なコミュニケーションの重要性を理解し、小さいちから失敗を恐れず何度も練習できる環境があるといふことは非常に大切なことだと思った。またICTは既に切っても切り離せない技術であり、その使い方と共に今後も積極的に授業に取り込み、付加価値の高い時間割出につながればと考える。 ICTの活用については保護者の肯定率が上がったが、学習成果の実感については昨年度より下がっている。低学年のタブレットの活用については特に工夫が必要ではないか、コロナ禍の中で学習について保護者に不安があるのではないかと思う。 タブレット端末に関しては、各学年のレベルに沿った説明・使用上のルールなども明確に示し、様々な壁がある中、比較的スムーズに導入が進んだものと考える。 コロナ感染症の影響から、タブレットを使った教育手段が急速に変わる機会を捉え、個々の興味を全体につなげる教育方法に取り組む努力が見られた。 教員もICTを授業の中にうまく取り入れており、内容が豊かになっていると感じる。併せて、実験も重視していることは大切だと思う。
力は運動、食育、生活習慣の総合力と捉える。 教諭、養護教諭の参加による指導を充実する。 遊び等の身体的な活動を伴う遊びの良さを取り 得も主体の特別活動を工夫し、互いに認め合える 年赤十字活動実践校として、活動を充実させる。	3.3 子どもたちは、コロナ感染予防のための生活習慣の徹底に取り組み、生活や学習の様子を見ても大きな課題は見られない。全校体制での生活指導の成果が現れている。 学校生活全般に関する評価はコロナ禍においても高く、教職員の努力の賜物だと思う。 萩小スタンダードが一定、子どもたちに浸透していると考えているが、学年学年により立派さがあるようだ。まずは萩小スタンダードが習慣になるよう、反復することが大切だと考える。 いじめ、不登校等への対策について保護者の肯定率がやや低く、具体的な対応策や相談体制について一層の周知が必要であると思われる。 いじめ防止だけでなく、いじめじめた側がどう対応したらいいかという教育も必要なではないかと思う。 いじめアンケートは学年が上がるにつれて、100%正解で記載できない人が増えているのではないかと思う。 現段階で立派ないじめはないが、いつでも声をあげられるよう、環境を整え、そのことを子どもや保護やに伝える努力をさらに進めていくとよいと思う。 学校が楽しめるか楽しくないかは非常に主観的な問題で、保護者の自由記述でも様々な意見が出ているが、どの子どもも安心できる居場所を学校につくることが大事だと思う。 少し違う視点になら、ヤングアンサーに対する杉並区や学校の体制等、課題として考えていただきたい。
触れ合う学びを大切にし、地域人材の活用を図 る者に、学校支援本部の活動を周知し、保護者の 参画意識も高める。 連携活動を展開し、子どもの「地域を見る目」を育 成的視野や多様な意見をコミュニティ・スクールの とし、「地域の学校」として充実した学校経営を進め と学校運営協議会の懇談会を通して、保護者の ニティスクールの意義の理解を深める	3.1 コロナ禍のもと、「萩小ワーハップカード」を作成して体力づくりに取り組み、栄養教諭と連携して食育授業を行い、体力、健康などの意識を高めている。 食育授業が活発に行われている。 栄養率が減ったのは食育の成果だと思う。 運動が好きな子はますます好きになると自信がつくよう取組みを、運動が苦手な子は体を動かすことに少しでも興味をもてる取組みなど、多角的な視点で計画していると理解している。 子どもたちの体力低下はコロナ禍でますます心配どころである。 体力測定の結果を見る限り、まだ取り組むべきことがあるのではないかと思う。 コロナ感染症の影響で、体力づくりに取り組むことは、困難が大きかった。運動場における休み時間に元気に遊ぶ遊びの表情がもう一つである。 元オリンピック選出などアスリートの交流も、運動の好き嫌いを問わず、子どもたちが興味をもてる取組みだと思う。
ての教職員が尊重的に子供に関わり、みんなで 空間で切磋琢磨し、多様な人材を互いに活かし、 活動を充実させる。 子ども们を育てるため、自己研鑽し、自らが学ぶ 員組織でありたい。	3.1 コロナ感染防止のため活動に制約がある中で、創立70周年記念行事、運動会、移動教室、異学年交流活動等を内容や実施形態を変更、工夫して実施し、子どもたちの自主的、協働的な態度を育てている。 70周年式典に6年生が参加し、合唱の披露等とてもよかった。自分たちも萩小の歴史を作っているんだという自覚をもってもらえたうれしい。 コロナ禍の中でも、子どもたちのつながりが希薄になることなく、学校の取組みが行われている。 学生横断の連携は非常に大切だと思う。またコロナ禍でも、どうにか子どもたちが楽しむ居場所を準備した教員には感謝をしたい。 継割りのつながりにおいて一点気になるのが、個人差があるではないが、他学年に対する子どもたちのコメントが厳しいと感じる場面があった。
①同様に、学校に関わる様々な組織と人材について、どの組織が何を支援しているのか分かれ難いところもあると思う。またそういった情報発信の際にには、文字量より視覚的なビジュアルコンテンツだとより一層伝わるのではないかと考える。 ②コロナ感染拡大防止のための制約のもので、学校の状況と当面する課題を共有し、学校運営が円滑に進められるように願って有意義な協議、意見交換を行った。授業参観を通して、子どもたちが落ち着いて学習し、生活しているこれが分かった。 ③2年ぶりに実施した教職員向けエコワークに、初めてCS委員の多くが参加し、学校施設の仕組みを通じ環境への理解が深まった。このことから、さらに、保護者、地域に広げていくべきことが必要であることが解った。 ④学校運営協議会に保護者代表も加わり、活発な意見交換ができたことは有意義であった。 ⑤PTAとコミュニケーションが課題である。地域の学校としての理解を深めたい。 ⑥荻小がさらに良くなるよう課題を見つけ、その解決に向けて動き、CSの良いと実感せるような活動を工夫することが課題である。	3.3 ①同様に、学校に関わる様々な組織と人材について、どの組織が何を支援しているのか分かれ難いところもあると思う。またそういった情報発信の際にには、文字量より視覚的なビジュアルコンテンツだとより一層伝わるのではないかと考える。 ②現在の荻窪小学校は、トップダウンとボトムアップの双方が上手くいってるからこそ良い雰囲気なのだと思っている。この回転が途切れないと、継続してほしい。 ③本校の教育や校務等に関わって多くの人材が専門性を発揮し、それぞれが役割を果たしている。学級支援員や介助ボランティアにより、子どものニーズに応じた支援をしている。 教員間の連携がよくなっていると感られる。 ④ICT推進により削除された時間を利用し、AIが入り込めない領域である教育者の育成につなげていくことが非常に重要なと考える。 ⑤本校の教員は若手が多いが、互いに授業を参観し意見や情報を交換して学び合い、子どもたちの教育に熱心に取り組んでいる。 ⑥担任によって学級運営に差があるといふ保護者の意見がいくつ見られたが、経験の浅い若手教員に最初から多くのことを求められるのは難しい。学年がひとつのチームとなって指導に過不足のないように補い合ってほしい。